立教大学 理学部 先端科学計測研究センター
「地上実験・飛翔体観測と理論による宇宙像解明の研究拠点形成」(平成27年度)に関する評価書

評価者	
所属	明星大学 理工学部総合理工学科
職名	教授
氏名	井上 一

1．研究の進捗状況,研究実績について

立教大学の先端科学計測研究センターという、必ずしも大きいとは言えない組織の中で、かなり広い範囲の基礎物理学研究が、宇宙像研究の拠点形成という大きなテーマで結びつけられて行われている。近年、われわれが存在するこの宇宙の理解は大きく進んだ。そして、その最前線をさらに切り拓くためには、実験・観測の装置的な面でも、理論的なアプローチの面でも、さまざまな面で、どんどん高くなる難度のかべを、新しい知恵と工夫で乗り越えていくことが必要となり、必然的に、それなりに大きなリソースを必要とする。むずかしいことは、新しい試みには、わき目も振らずある方向に突き進んでみる面が必ず必要で、時には、かけたリソースに見合った成果が出ないこともあることである。その点、本研究のように、広い範囲の研究をたばね、共同研究の形で、いくつかの方向の深堀り研究をつなぎ、たがいに補い合って、全体として、着実な成果をみせていくことが有効であろう。本研究では、さまざまな切り口で、新しい方向を探る試みがなされており、かつ、それらをつなぎあわせる努力も払われて、全体として成果をあげつつあると評価する。

2．改善が望まれる点

いろいろな面での新しい方向を探る研究が束ねられており、基礎研究としては、それぞれの担当研究者が、それぞれの目指す方向に、自分が思うままに研究を進める面が許容されるべきである。しかし、同時に、その研究が、この「宇宙像研究の拠点形成」という全体としての方向にどう貢献していくかとの視点も、常に、あるべきだろう。今回の中間報告を見た範囲では、あまり、それが示されているとは言えない。今後、この研究がさらに進められていく際に、それぞれ、自分の研究の位置づけをよく考え、宇宙像研究全体の意義とその中での自分の研究の役割を自覚していくことを期待する。それは、さらに、研究者それぞれが将来の研究の方向をよく考えてみることにもつながろう。

平成28年3月21日作成